

乾杯のご発声

皆様この度は本当におめでとうございます。

実はわたくし、筋・筋膜性疼痛という痛みに襲われてしまっていて、右半身の背中、肩、首がずっと痛いのです。お席に来てくださった皆様とも座ったままの名刺交換で、本当に失礼いたしました。

名古屋場所が終わったところですが、今場所、わたくしが一番嬉しかったのは、白熊の十両優勝なのです。今日、笹川先生が仰っていたことと本当に同じことを、わたくしも考えておりました。

二所ノ関親方、72代横綱稀勢の里ですが、大スターの弟子、大の里の負けが込んでも全然動じなかったそうです。逆に、恐らく白熊の優勝にも動じないのではないかと思うのですね。

これは相撲関係者に聞いたことなのですが、二所ノ関親方はとにかく後継者を育てるために徹底して基礎を叩き込む主義だそうです。相撲の基礎というのは地味なのですよね。テッポウとすり足、四股。これが中心では飽きます。

実際、多くの関係者から、大の里にもっと実践的なことも教えたらかどうかと、随分言われたと聞きます。でも二所ノ関親方は力のある後継者をつくらなくてはいけないと。それで弟子たちには基礎から叩き込んでいて、今も叩き込み中だそうです。

ですから、ここにお集まりいただく皆様のお仕事を毎回拝見していて、後継者をどう作っていくのかといつも感じます。幸いなことに、志望者が増えているということです。大変嬉しく思いますが、ぜひとも力のある後継者をつくっていただきたいと願っております。

わたくしは白熊の優勝を見ながら思いました。二所ノ関親方はたぶん大の里ひとりのスターの後継者ではなく、盤石の後継者軍団を考え、おそらくすべての力士を基礎から鍛えているのだと思います。

皆様のお仕事にもきっと地味な基礎というものがあるだろうと思います。その力をつけることで、白熊のように花開けば、これは強力だと思います。

皆様への感謝と共に、ぜひ良い後継者たちを育てていただけますように、そして、わたくしの筋・筋膜性疼痛が早く治りますように乾杯をしたいと思います(会場笑い)。

では皆様乾杯！

ありがとうございました。



表彰選考委員長
内館 牧子

祝賀会









受賞者手記目次

第61回社会貢献者表彰 受賞者30組（敬称略）

砂漠緑化団体「オールドスの風」（有限会社バンベン）	30
公益社団法人 ON THE ROAD	32
NPO 法人 mama's hug	34
NPO 法人 熱帯森林保護団体（RFJ）	36
NPO 法人 ウィーズ	38
認定 NPO 法人 スマイルオブキッズ	40
NPO 法人 リバティール・ウィメンズハウス・おりーぶ	42
庄山 好子	44
全国ポリオ会連絡会	46
NPO 法人 あきた結いネット	48
NPO 法人 のびの会	50
NPO 法人 アーシャ ^{イコール} = アジアの農民と歩む会	52
認定 NPO 法人 きららの木	54
NPO 法人 寺子屋方丈舎	56
NPO 法人 日越ともいき支援会	58
一般社団法人 ラ・バルカグループ 久遠チョコレート	60
.Style	62
NPO 法人 eboard	64

ブルーチーズ	66
一般財団法人 日本熊森協会	68
一般財団法人 イノセンス・プロジェクト・ジャパン	70
NPO 法人 セイブ・イラクチルドレン・名古屋	72
NPO 法人 猫の足あと	74
NPO 法人 暮らし応援ネットワーク	76
認定 NPO 法人 Homedoor	78
NPO 法人 FOOT & WORK	80
NPO 法人 沖縄青少年自立援助センター ちゅらゆい	82
阿部 裕	84
日本雁を保護する会	86
NPO 法人 維新隊ユネスコクラブ	88



対象となる功績内容

- ▶精神的、肉体的な著しい労苦、危険、劣悪な状況に耐え、他に尽くされた功績
- ▶困難な状況の中で黙々と努力し、社会と人間の安寧・幸福のために尽くされた功績
- ▶先駆性、独自性、模範性などを備えた活動により、社会に尽くされた功績
- ▶海の安全や環境保全、山や川などの自然環境や絶滅危惧種などの希少動物の保護に尽くされた功績
- ▶家庭で実子に限らず多くの子どもを養育されている功績

その他の功績

砂漠緑化団体「オルドスの風」(有限会社バンベン)



代表
坂本 毅

佐賀県／福岡県

日本語教師を志していた坂本毅さんは、青年海外協力隊として1991から3年間、中国内モンゴル・オルドスで過ごす。そこには想像していた大草原はなく、過放牧などにより砂漠化の最前線と化し、どこまでも続く砂漠は黄砂の発生源にもなっていた。帰国後、企業で働きながらも、オルドスに緑を取り戻したいという9年越しの夢が忘れられず、一人で砂漠緑化を実現しようと「有限会社バンベン」を2004年に設立。内モンゴルの塩を日本で販売し売上の一部を砂漠緑化事業に投入している。もともと大草原だった場所は、植物の生態系が崩壊し砂漠になってしまったものの、わずかだが降水し地下水もあり、条件を整えて植林すれば緑を取り戻す可能性が高い。植林は、地元の人々とかつての教え子たちの協力を得ながら土地の状態を見極め、何十年もかけて地道に続けている。「塩の売上で植林し、生態系を回復させ、そこで付加価値の高い有機農業を根付かせ、地元の経済圏が潤うモデルを確立させる」坂本さんは住民の収入アップと緑化の両方の実現のために挑戦を続け、オルドスモデルとして他の砂漠化地域へも導入し、環境問題、貧困問題の解決を目指している。

1991年から3年間、私が青年海外協力隊として日本語を教えた地、中国・内モンゴル・オルドス。内モンゴルというと大草原というイメージがありますが、ここオルドスは過放牧などによって砂漠化が進んでいました。オルドスは砂漠化の最前線でもあり黄砂の発生源でもあります。「第二の故郷オルドスを元の緑に戻したい!」「…そうだと美味しい内モンゴルの塩を売って、売上の一部をオルドスの砂漠緑化につき込もう!」そう思いついて2004年に「塩を売って緑を買う会社」バンベンを立ち上げました。

今年で創業20年。この節目の年に社会貢献者表彰という名誉ある賞を受賞できたことはとても名誉なことだし、今後10年20年と続けていくための糧となります。本当にありがとうございました!

当会は以下の5項目を活動の指針としています。

1：寄付や助成金に頼りすぎない事業。

砂漠緑化事業は何十年と継続しなければ成就しません。当会は活動費のほとんどはモンゴル塩の売上から得られています。活動資金を自主財源で賄っていることで、規模は小さくても継続していくことができます。

2：現地の人たちが主体の緑化事業。

まずは当会の塩の売上の一部を緑化に投入しますが、植林をするのは地元の方々が中心です。そして緑化した土地で有機農業など高付加価値農業を実践し、現地の方々の生活を豊かにし、その収入の一部を緑化に再投入⇒高付加価値農業拡大⇒さらに緑化拡大⇒…。という「環境と経済の好循環モデル（オルドスモデル）」を作ることを目指しています。



3：教え子たちとのつながり。

30年前高校生だった教え子たちは今や40代。多くは私の緑化事業に協力してくれています。最近では教え子の子どもたちも積極的に植林に参加してくれるようになり、事業は次世代へと受け継がれていきます。

4：世界の砂漠緑化にも貢献。

上記オルドモデルが完成すれば、世界の砂漠化に苦しむ地域へ展開できます。まだモデルの完成とは言えませんが、今年に入ってUAEのアブダビからお声がかかり、砂漠緑化と乾燥地農業のプロジェクトを立ち上げました。

5：国や民族や宗教の壁を超える事業。

当会の活動には様々な国籍・民族・宗教の方が参加しています。みんな同じ志を持って、同じ方向を向いています。志の共有が砂漠化を止め、貧困や紛争や内戦のない世界へ導きます。

この事業はどなたでも参加できます。例えばモンゴル塩は500円ですが、1袋買うと、オルドスの砂漠に1本、木を植えることができます。また塩は食品、美容、健康などあらゆる分野で使われます。ぜひモンゴル塩を使ったコラボ商品を作りましょう！そして一緒にオルドスへ行き、砂漠に木を植えたり、有機農業をしたり、未知の植物を探したり、ワクワクしながら一緒に緑を増やしていきましょう！



▲植林初期：2005年



▲植林15年後



▲植林の様子



▲植林時集合写真：2014年



▲塩の販売



▲内モンゴルの岩塩

公益社団法人 ON THE ROAD



代表理事
津田 和泉

佐賀県

前代表の古場英樹さんは、高校時代に上級生から壮絶ないじめに遭い、その記憶は大人になってもトラウマとして残ると実感していたことから、かつての自分と同じ思いをしている子どもたちを救いたいと、2015年「いじめ撲滅」を掲げた実行委員会を設立した。佐賀県内の学校の道徳の時間に、いじめの怖さと心を守る大切さを伝える出張授業を行うと、それが評判となり、佐賀県内の教育委員会、学校、警察と信頼関係を構築していった。現在、365日24時間行う電話、LINE相談、駆けつけ対応では、県内の教育委員会、学校、保護者が、子どもの状況を共有し、いじめを撲滅する体制をとっている。これまで相談を受けた件数は300件で、子どもたちの9割が復学している。また不登校児の学習の遅れを取り戻す学習支援教室の実施、チャリティイベントも開催し、親子の社会的孤立を防いでいるが、これらすべての事業を無料で行っている。2023年に公益社団法人化、更に難病児、きょうだい児を持つ家庭へのサポートも開始した。「すべては子どもたちのために」を理念に、相談支援、復学、進学まで伴走し、子どもたちが主体的に未来を描ける社会を目指して活動している。

(推薦者：伊万里市カブトガニを守る会)

はじめに、素晴らしい賞をいただいた事に感謝を申し上げますと共に、丁寧な面談や夢のような表彰式などで祝福くださった財団の皆様や審査に携わっていただいた皆様に心より御礼申し上げます。

私共は2015年秋に、佐賀県から子どものいじめをなくしたいとの願いとともに事業を開始しました。最初は啓発のイベントや学校に赴いての道徳の授業が主たる事業でしたが、コロナ禍を契機に子どもたちからの個別相談が増え始め、その内容も子どもの命にかかわる深刻なものが増えていったことから、24時間の個別相談・駆けつけ伴走支援に取り組むようになりました。

子どもの話を丁寧に聞き、保護者や学校、教育委員会と連携して学校に戻れるようサポートをしています。それだけでは解決に至らない場合は、警察や病院、法律関係者への橋渡しなども行います。

また、勇気を出して学校に戻った児童生徒の中には、勉強の遅れがネックになり、再び学校に通えなくなる子どもも多いことから、学習支援部を設けて子どもたちの勉強のサポートも毎週2回の定期教室や受験対策、個別指導などで実施しています。

地域の大人にも卒業や子どもたちのことを知ってほしいと願い、様々な体験学習などのイベントも年に数回行って、子どもたちを見守る地域づくりにも取り組んでいます。

さらに、相談者の中には兄弟姉妹に難病や障がいを持つお子さんも少なくなく、病児本人はもとより、難病時の兄弟姉妹たち（当会では「きょうだい児」と呼んでいます）のケアも必要だと考えるようになり、公益法人化した2023年に難病時・きょうだい児支援部門を新設し、サポートできる子どもの裾野を広げるべく奮闘しています。

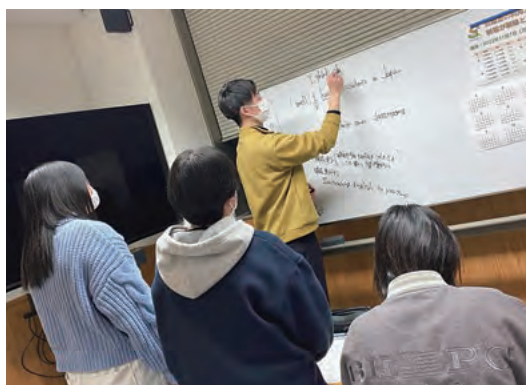
こういった取り組みを見知ってくださった支援者の方々のお力添えで今回の受賞に至ったことを思いますと、たくさんの方々の志ある支援の賜物であると改めて感謝の念でいっぱいです。今回の受賞を機に、今後も現場から気づく子どもたちのSOSの声に耳を澄ませ、必要があれば変化も恐れずに事業に取り組んで参ります。



▲すべては子どもたちのために



▲伊万里焼の絵付け体験



▲学習支援の様子



▲子どもたちと地域の歌を作り、ライブハウスでダンスと歌を披露



▲洋上でのごみ拾い体験

NPO 法人 mama's hug



代表理事
山本 加世

神奈川県

代表の山本加世さんは、産前うつになった際、優しさホルモンといわれる「オキシトシン」が分泌されるベビーマッサージに出会う。我が子だけではなく、他の子どもへも愛情を感じる効果を実感して、ベビーマッサージの資格を取得、2003年に任意団体をつくり、ひとりでベビーマッサージを広める活動をスタートした。さらに、より母親ケアに注力しようと2006年にNPO 法人 mama's hug を設立し「100の言葉より hug (ハグ)」を理念に、ベビーマッサージを発展させた「Touch Hug」を多くの人に伝える取り組みを開始。「Touch Hug」は、「親子や家族との手と手からはじまる”ふれあい”を大切にするスキルで、身近な人へのTouch (触れる) を大事にし、自分自身も癒し、幸せな気持ちになる効果があり、どの年代でも使えるコミュニケーションツール。mama's hug ではタッチケアの講座、育児相談を実施、またママ学校を創設し、これまでおよそ6,000人の母親をサポートしている。この活動は米国のボストンにも広がり、海外での“孤育て”に陥りやすい母親たちにも好評を博している。さらに母子をサポートする人材育成の資格講座も開催し、これまで400名が受講。「子育ては地域でするもの」とし、現在、地域の神社と協働で地域食堂を開くなど、地域の人と人をつなぎ、子育てしやすい社会づくりに取り組んでいる。

(推薦者：社会福祉法人 国府津保育園会)

まだ世の中にベビーマッサージが定着していない22年前に娘が誕生したことをきっかけにこのタッチケアに出会う。タッチケアを通じてママたちの産後うつのサポートをはじめ、居場所づくりや行政と連携をとりながら母親支援をしてきた。2020年にファミリーサポートセンターの受託し、孤立母子とボランティアとを結びつける活動を活性化させる。その中で障がい児の預かり先やサポート先が少ないことに気づき、当事者や専門家だけではない市民レベルのサポートシステムと子育てに寛容なまちづくりを始めた。それと同時に子育てをサポートする人(保育士や介護士)のメンタルを含む、「サポートをする人を支援する」ために、企業、行政、地域の人たちがファストではないスローなイノベーションのチームビルディングも含めたプロジェクトを遂行している。





▲ジュニアベビーシッター養成講座 おむつ替え



▲パパによる子育て研究所企画



▲産前産後サロンマタニティタッチケア



▲小学校にて低学年の性教育 友達と仲良くする方法



▲東北大地震全国から寄せられたママからママへの手紙



▲お堀端クリーン

NPO 法人 熱帯森林保護団体(RFJ)



代表
南 研子

東京都／ブラジル

アマゾンの森は大規模開発で破壊が進行しているが、そこに暮らす先住民族が自分たちで森を守っていく主体的な取り組みを支えたいと、南研子さんが設立した団体。ブラジルのマトグロッソ州とパラ州に掛かる18万平方km（日本の国土の約半分の面積）のシンゲー先住民国立公園と呼ばれる広大な地域で1989年から支援活動を行っている。南さんは1992年に初めて現地を訪れ、この32年間で識字教育（1994年～2013年）植林（1997年～2000年）女性自立支援（2000年～2018年）水銀汚染調査、医療支援（1992年～2013年、現在も必要に応じて継続中）伝統文化継承（1995年～現在）など多岐に渡り支援事業を実施。また、集落内で貨幣制度は確立していないが、この数年で導入されることは必至であり、住民の経済的自立を促進するために養蜂事業も始めた。2014年からは、急速に進む開発や伐採と、乾燥化による大規模火災で加速度的に森が消滅しており、森を火から守る消火防火支援事業を展開している。例えば2021年には1年間で13,235km²（東京ドーム28万個分）の森林が消えた。南さんたちの支援対象地域は、氷河期にも緑が残り種の避難場所となったことから、生物遺伝子資源の宝庫と呼ばれているが、いまだ調査は2%しかなされていない。一方、開発の影響で日々おびただしい数の生物が絶滅し、甚大な地球的規模の損失が危ぶまれる。地球上の酸素供給源であるアマゾンの森を守ることは人類の使命ともいえる。

（推薦者：山中 敦子）

ブラジルのマトグロッソ州とパラ州を流れるシンゲー川（アマゾン川の主要な支流）の上流域から中流域にかけて、先住民族保護区がまとまった広大なエリアが広がっているのですが、私たちはこの一帯でアマゾンの森を守るため1992年から先住民と共に活動しています。

これまで2,000日以上現地に滞在し、識字教育、植林、女性の自立支援、水銀汚染の調査や医療支援、伝統文化の継承など多岐にわたって行ってきましたが、現在、特に力を入れている活動が2つあります。

ひとつはアマゾンの森を火事から守る消火防火活動です。開発や伐採の影響で乾燥化が進み、毎年乾季になると森林火災が発生するようになりました。一度火災が起きると消火の術がなく問題となっていたのです。私たちが活動している地域では、森を知り尽くした先住民約150人に消防訓練を受けてもらい、消防団を結成しました。

8年間にわたる地道な防火パトロール活動と火災発生時に消防団員たちの迅速な消火活動のおかげで、大火事が発生せずに済んでいます。そのことがブラジル政府に評価され、この消防団員のうち直接RFJ主催の訓練を受けた15名が国の正式な消防士として認定され、そのうち7名はブラジル環境省の職員として1年間、森林の消防士として任務につくことになりました。小さなプロジェクトとして始めましたが、私たちの活動が“先住民による防火・消火活動”の先駆的なモデルケースとなり、より広範囲に及ぶ先住民居住地域に伝播・浸透しつつあります。



もう一つは養蜂事業です。先住民保護区では未だ貨幣が流通していませんが、ブラジル社会の価値観に従わざるをえず、貨幣経済の導入も余儀なくされることでしょう。大企業のシステムに飲み込まれ、安易な換金作物栽培を広範囲で行い、取り返しのつかない状態になった他の保護区の例もあり、この地を守る手段として、自然環境を維持再生し、かつ伝統文化にもとづき先住民の経済的自立をはかる唯一無二の対策として養蜂事業にたどり着きました。

2010年から、5集落を対象に養蜂の技術、採れた蜂蜜をブラジル社会の市場に流通、販売させるところまでの知識や技術を習得してもらうことを目的に、専門家を雇い、現地視察や講習会など地道な活動を行いました。

市場と流通の確保をするためにはブラジル社会における諸条件や規定をクリアする必要があるため、先住民らとその技術を身につけるために時間がかかりました。やっとのことで市場と流通の確保ができたところで、コロナ禍となり出荷が遅れましたが、2024年から市場を持ち、販売を開始するまでになりました。

「地球の肺」とも言われるアマゾンの熱帯林。私たちの生活と命を守ると共に次の世代に安全で持続可能な地球を引き継ぐためにも、かけがえのないアマゾンの森を守ることは私たちの務めだと考えて活動を続けています。



▲カヤボ族のリーダー メガロン、南さん、カヤボ族の長老 ラオーニ



▲開発で大規模に伐採されてしまったエリアが
ちこちにある



▲ハチの巣箱



▲経済自立に向けて養蜂を始めハチミツを採っています



▲消火中



▲頼もしく使命感をもった消防団員

NPO 法人 ウィーズ



理事長
光本 歩

千葉県

両親の離婚により父子家庭で育った光本歩さんは、自身の経験から「家庭環境によって子どもが夢や希望を持ってなくなるのはおかしい」と働きながら学習支援塾を始めた。誰にも悩みを打ち明けられない子どもたちの心の声に触れ、子どもには健全な自尊心の育成が必要と実感しNPO法人ウィーズを2016年に設立。主に親の離婚や別居をはじめ、家庭環境、人間関係に悩み苦しむ子どもたちを支える活動を行う。離婚で離ればなれになった親との親子交流支援、10代の子どもたちからのLINE相談、2ヵ所で居場所の運営をしている。さらに支援の手を増やす目的で支援者養成プログラムも実施。およそ138名が修了し、修了者は親子交流支援員やLINE相談員として活躍している。居場所「みちくさハウス」は、家庭や学校などから少し離れ、子どもたちや母子の心身の安心と安全を確保する目的で、これまで述べ1,500名が利用した。2012年から静岡県委託事業として行ってきた親子交流支援は、同県以外の親子のために2016年から自主事業としても行っており、2019年からは親子交流支援・民間団体として全国初の無料支援に踏み切った。最近ではメタバースを使ったオンライン居場所を始め、声をあげられない子どもたちへリーチできるようより一層注力している。

(推薦者：山中 敦子)

この度、NPO法人ウィーズに対し、社会貢献者表彰という大変な名誉とご縁をいただけましたことを、団体一同心より深く感謝を申し上げます。

私たちNPO法人ウィーズは、親の離婚や別居、家庭環境や人間関係に悩む子どもたちを支える活動を行っております。親子交流支援やLINE相談、居場所「みちくさハウス」の運営などを通じて、子どもたちや母子・父子が心身ともに安心できる場を提供しています。

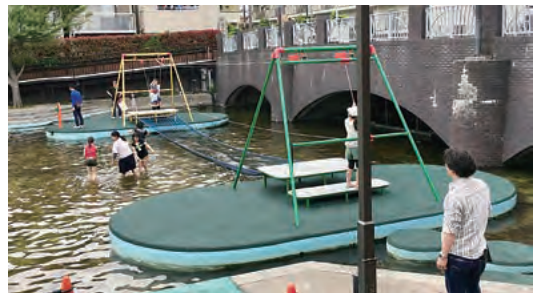
また、2024年からは新しい事業として「パラパルミル・ジャパン」に取り組むこととなりました。フランスでアソシアシオン（民間組織）からスタートした「パラパルミル」という活動を理事長の光本が知ったのは、今から15年も前のこととなります。パラ＝パル＝ミルとは「1,000人の親」と直訳した名前の通り、親のように「その子ひとり」に関心を寄せる大人をいっぱい増やそうという取り組みで、「フランスの半里親制度」と呼ばれることもある活動です。今回の受賞に際しましても、この「パラパルミル・ジャパン」の取り組みに深く関心を示していただきました。15年前から知っていたこの活動をなぜ今この時に始動させることになったのか、この活動にかける思いはブログにも記してありますので、ご興味のある方はぜひ『光本歩 note』で検索ください。一人でも多くの皆さまのご理解やご関心、ご支援を賜れましたら幸いです。

そして今回の受賞に際し、他の受賞者団体の皆様が行われている様々な活動に触れる機会をいただきました。皆さまそれぞれの熱意と取り組みに大変感銘を受けるとと

もに、それぞれの団体が異なる視点から社会課題に取り組み、思い一つに邁進している姿に改めて深い敬意を表します。また、懇親の場においては多くの方々と交流をさせていただき、これまでの経験や知見を共有し合うことで刺激を受け、受賞式前日の夜は団体の支援仲間と共に、自分たちのこれからに向けて夜深く時間を忘れて語り合う場面もありました。

私たちは、今後も「子どもたち・かつて子どもだった大人たち」が健全な自尊心を育み、未来に希望を持てる社会を目指して一層の活動を続けてまいります。活動の在り方はそれぞれ違えど、社会貢献に携わる方々の思いはどこか一つに繋がる部分があると感じております。ここでいただいた良いご縁が、良いアウトリーチに結びつき、互いの理解と支援の和がますます広がって良い社会の礎となっていくことを、心から願っております。

改めまして、社会貢献者表彰の受賞、ならびに公益財団法人社会貢献支援財団、委員、役員の皆様方、この度の表彰、誠にありがとうございました。



▲両親の別居・離婚後に子どもと別居親の交流をサポートします



▲子どもたちからの直接の相談に月2,500件程対応しています



▲約100名のスタッフが各地で活動してくれています



▲クリスマスなどの家族行事の際にはイベントも実施します



▲体験機会の提供として染色教室をおこないました



▲子どもたちの居場所として食と学びの機会の提供もしています

認定 NPO 法人 スマイルオブキッズ



理事長
松尾 忠雄

神奈川県

「愛する子どもたちのために」を理念に、自宅を離れて病気の治療のために、全国各地から神奈川県立こども医療センターに入院する患児と付き添い家族のための滞在施設「リラのいえ」の運営と、こども医療センターに入院・通院している患児のきょうだい児が楽しく過ごす場所「きょうだい児保育」さらに病気や障がいのある子どもとその家族が交流する場として「ふれあいコンサート」や訪問コンサートを開催している。滞在施設「リラのいえ」は、付き添い家族ひとり1泊1000円で、経済的負担を軽減し、総勢80名のボランティアスタッフがシフト制で、24時間常駐。その運営を支えるとともに、患児と家族の立場にたって、きめ細かいサポートを行っている。また「きょうだい児保育」との併設は全国でも珍しく、利用料も1時間300円、家族が安心して患児の看病ができると、多くの声が寄せられている。ボランティア、支援者が、病気の子どもとその家族を支え続け、2023年に法人設立から20年を迎えた

この度の社会貢献者表彰の受賞は、日々現場を支えるボランティアスタッフにとって大きな励みとなりました。

また、表彰状をリラのいえのダイニングに掲示したところ、利用者の皆様からも驚きとお祝いのお言葉をいただきました。

喜び合える方がたくさんいること、これこそが私たちの財産であり、活動が人の力で支えられていることを再確認する機会となりました。

当法人の活動は、ひとりの父親の思いから始まっています。娘さんが脳腫瘍を患い、1998年にわずか6歳で亡くなってしまいます。父親は失意の中にいましたが、次第に闘病中お世話になった方々への感謝の気持ちが大きくなっていきました。現在闘病しているご家族を支えたいと、2003年に法人を設立しました。

それから今日に至るまで、様々な方との出会いで活動が広がっていきました。特に、「よこはまファミリーハウス」のオーナーとの出会いは大きな出来事でした。当時、神奈川県立こども医療センターに勤めていたオーナーが、自宅を滞在施設として提供していました。需要が増えたため新たな施設を作ろうと、同センターの先生方のOB会と当法人とが協働し、設立準備委員会を立ち上げました。よこはまファミリーハウスの活動実績により信頼を得て、募金活動で建設資金を獲得、土地は県から無償貸与を受け、2008年に「リラのいえ」を開設します。翌年には、きょうだい児保育事業、障がい児とご家族を招待するコンサート事業を開始し、病気や障害のあるお子さんとご家族への支援活動が広がっていきました。

心あるスタッフが集まり、ご家族の立場に立って活動をしています。支援者の皆様にも恵まれ、金銭的な支援のほか、施設で使用する物品の寄付も多くあります。企業の皆様には、施設の清掃やイベントの共催など、様々な形でお支えいただいています。



表彰式典では、日本財団笹川会長より、活動を継続していくこと、次世代につないでいくこと、ファンドレイジングに注力することの大切さについてお話がありました。

このことは、近年私たちが取り組んできたことに合致しており、進むべき道を照らしていただける激励の言葉となりました。

これからも常にお子さんご家族に寄り添い、必要とされるサポートを支援者の皆様の思いとともに丁寧にお届けしてきたいと思っております。そして、これまで関わりを持ってくださった方々への感謝の気持ちを忘れず活動を続けてまいります。

この度の受賞に心より御礼申し上げます。



▲【リラのいえ】入口の看板



▲【リラのいえ】利用者へのミールサポート



▲【家族の交流の場の提供】重症心身障がい児と家族を招待するコンサート



▲【広報活動】チャリティーコンサート出演者とボランティアスタッフ



▲【きょうだい児保育】保育士ときょうだい児



▲【きょうだい児保育】保育室の様子

NPO 法人 リバティィー・ウィメンズハウス・おりーぶ



理事長
山本 良子

滋賀県

精神福祉士の仕事を通じて、女性の依存症者をワンストップで支援する必要性を感じていた山本良子さんが滋賀県で設立した団体。通院している患者は2週間に一度の割合でカウンセリングを受けるが、元の環境に戻れば効果が薄れ、自立に結びつかず、再起の機会が与えられていなかった。そこで大津市内にグループホーム「ステップハウス・おりーぶ」を開設し、生き方を変える決心をした女性を対象に、毎日のプログラムで自分と向き合い、共同生活を通じて社会性を育み、学びあい、応援しあって様々な依存症から回復し、心と体の社会復帰の準備を整える居場所とした。依存症に対する社会的な理解も進まない中、頑張ることのできる人を応援する施設はあるが、今はまだ頑張る気力のない人を応援する施設と位置付けている。現在4棟のグループホームを運営。また通所型の自立訓練施設「デイセンター・おりーぶ」も備えている。利用者は病院や自治体を通じて紹介があり、スタッフが面会して本人の意志を確認し、入所当日は迎えに行く。社会復帰しても、その女性が自分に合った職場環境に身を置けるようになるまで見守ることを忘れず伴走する。

このたびは、思いがけず栄誉ある社会貢献者に選定いただきましたことを、職員・支援者一同深く感謝いたしております。

おりーぶの活動は、生きづらさを抱えた女性「特に各種の依存症に苦しんで行き場のない方」の支援の必要について何かできることはないか？というところから13年前にスタートしました。まず手がけたのは、心と身体の回復には安心できる居場所がある事であると、グループホームの設立に取り掛かりました。自助グループとしての時間を持ちながら医療と福祉両面のお助けが出来るといいなと思いつつ運営を続けて二年目に、自立訓練の取り組みの強化のためデイセンターを開設いたしました。

依存症からの回復プログラムとして、運動、野菜作り、自助グループ、認知行動療法、アロマセラピーなどを取り入れつつ苦しみながら学ぶより、自発的に行動していただく事に焦点を合わせていきたいと思っています。

頑張る人を応援する社会を目指すことの重要性にはこの国も近年理解度が高まっておりますが、依存症がらみで法に触れる行動に及んだ女性に対して、社会復帰の道は依然として暗く、自己責任論が大勢を占めているのが現実です。少年院、刑務所を出所しても受け入れ先のない方の中でグループホームに入り、今までの習慣や環境からの決別をめざす方に対応するべく、自立準備ホームの指定を受けました。

古い習慣を変えていくには、時間もかかりますし、依存対象「アルコール・覚せい剤・処方薬・摂食障害・病的窃盗・ギャンブル・携帯電話など」に対する過剰な依存からの決別は、決心したからと言って一人で戦うには困難が伴いますし、頭で理解したからと言って改善するものでもないのが現実です。医療の力を借りながら、回復をめざす仲間との暮らしが有効であるというのはやがて、日常の中で実感できるように

なるようです。

今、多様性を容認する世の中になりつつあるならば、おり一ふの仲間たちは、依存症により問題を起こしてしまった事実は受け止めつつも、いつからでもやり直せることを実感することを目指す毎日を送ることに重きを置くようにしています。

私たちは、小さな成功体験を積むことで、自分たちが決して劣った存在ではないことを受け取ることでも大切です。仲間たちにもいろいろな可能性があること、希望の未来を描くことが出来ること、それぞれの幸せを手に入れることで、同じ悩みを持つ他者に手を差し伸べる存在になりうるというビジョンを掲げつつ歩んでいきたいと存じます。

今回の受賞が、あまり知られることのない私たちの活動にとって大きな励ましを頂いたものと感謝申し上げます。



▲京都新聞福祉賞授賞式



▲畑作業



▲デイセンター外観



▲ハイキング



▲花見



▲湖水浴



▲収穫

庄山 好子



熊本県

旧満州、現在の中国・黒龍江省の出身の庄山好子さん、1987年に中国残留子女2世の夫とその家族とともに、26歳の時に来日。日本といえば、富士山と桜しか知らなかった庄山さんに、地域の人々が、温かく身振り手ぶりで日本語を教えてくれたことに感動し、日本が大好きになった。子どもが生まれると、外国にルーツのある児童と家庭に対する周囲の理解不足と、学校の先生、地域の人々との間に言葉や文化の壁があると感じ、その解決に向けて学校や教育委員会に働きかけた。その甲斐あって、1999年から熊本県菊陽町では、いち早く中国にルーツのある児童を支援する活動がスタート。以来、庄山さんは、菊陽町の日本語指導員として、日本語指導をはじめ、家庭訪問時の通訳、学習、進路、生活面での相談への対応、多文化共生の講師、運動会での中国語放送、在留カードの更新手続きの翻訳等を行う。また病院受診の同行、生活支援、学校の提出物の手伝いなど、指導員の範疇を超えて献身的にサポート。町内8つの小・中学校に関わり、これまでに100名以上の児童生徒を支援した。また、日本の児童に中国文化や中国語に親しんでもらう「パンダの会」も定期的に開催するなど、菊陽町の多文化共生の道へ大きく貢献。50歳の時、日本でお世話になった方々へ恩送りしたいと日本に帰化した。

この度は、社会貢献者表彰受賞の栄に浴し、感激と喜びに堪えません。改めて私や菊陽町の取組に光をあてていただきました安倍昭恵会長様をはじめ、関係の皆様にご心より感謝申し上げます。

私は、中国人の両親のもとに生まれ、日本に住む親戚を訪ねる短期間の来日と聞かされて日本に来て以来、三十七年の月日が流れようとしています。来日当初は孤独で、頼る人や日本語を教わる人もいませんでした。そのような中、義父から「これからは家族全員で日本に永住する」と告げられたときは、それはそれは悲しくて中国へ帰りたいとばかり考えていました。私の中国名は藤淑香ですが、永住することが決まっからは庄山好子と名乗ることになりました。初めの頃は新しい名前に慣れなくて、自分が自分でなくなったような絶望にも似た感覚を覚えたことを思い出します。

そんな私に転機が訪れたのが、菊陽町のみなさんとの出会いです。当時、菊陽町役場の担当者が私を訪ねてこられ、菊陽町に住む中国人に対する通訳や相談業務を依頼されました。私は誰かのお役に立てることがうれしくて、すぐ仲間とともに活動を始め、人生の新たな一歩を踏み出しました。私が出会った中国をはじめ外国にルーツを持つ人々は皆、なんとか日本社会に溶け込み、家族で支え合い、日本社会に貢献しようと懸命に努力する人ばかりでした。その人々との出会いがさらに私に勇気と活力を与えてくださり、今まで活動を続けていくことができました。これらの出会いがなかったら、今の私も今回の受賞もなかったと思います。小学生の頃に出会った子どもたちが中学生・高校生と成長し、さらに大学や専門学校等で学び、今や立派な社会人となって日本社会でグローバルに活躍するほどに成長しました。この子らの成長やご家族の



暮らしに寄り添わせていただいたことは、私にとってこの上ない喜びであり、私の人生そのものと言っても過言ではありません。お陰さまで私が多くのおみなさんと出会い、つながりながら生活できるようになったように、私の家族にも多くの友人ができ、幸せに暮らしております。

今回の受賞に際し菊陽町やこれまで出会った皆様に改めて感謝申し上げますとともに、中国と日本との心の架け橋となれるよう引き続きご恩返し取り組みを仲間とともに続けて参ります。

また、菊陽町では、台湾企業などの進出により外国の人たちとその子どもたちの人口が増えています。台湾をはじめとする多くの国々の子どもたちやその家族と共に歩み、多様性を深めることで誰もが暮らしやすい社会づくりに微力ながら支援することで私や家族を支えてくださったすべての皆様にご恩送りをしていく決意を新たにしました。



▲学校からのお知らせを翻訳中



▲学習指導の際は子どもの目線に合わせる庄山さん



▲5年前の卒業式から三か国語での式辞を開始しました



▲27年前活動を始めたころ中国に親しみを持ってもらうため菊陽町の小学校で行った文化紹介



▲児童の頃から国際理解を深めるために開催する「パンダの会」



▲生徒の志望校合格のため、受験用のテキストを購入し入試対策の指導を行います

全国ポリオ会連絡会



共同代表

森山 幸恵

エンジョイポリオの会
(福岡市 九州地方)代表

兵庫県他

ポリオ（脊髄性小児麻痺）は国内では昭和30年代まで断続的に流行し、当時罹患した人は平均71歳となった。昭和36年に始まったワクチン接種により発症は激減し、生ワクチンによる被害が少数あったものの、不活化ワクチンの導入で発症がなくなり、現在国内では過去の病と考えられている。しかしポリオにより手足に麻痺が残った人は、ポストポリオ症候群という二次障害に見舞われることが明らかになってきた。ポストポリオの正しい情報をポリオ経験者へ伝えるため、国内各地に相次いでポリオ罹患者の会ができた。相互に連絡を密にとりあい、助け合うことを目的として2001年に全国ポリオ会連絡会を発足した。全国ポリオ会連絡会は、全国各地の会員のために、ポストポリオの情報の発信と伝達を行ってきた。リハビリテーション学会にシンポジストとして出席、パネル展示も行って、医療関係者へ協力を要請。また、カーボン装具の周知、生活の工夫の情報の共有等、様々な活動を行っている。さらに、障害を抱えて生きる者が暮らしやすい社会となるよう、社会にも働きかけてきた。また、これまでに5冊の本を出版し、会報は年三回発行。ホームページでも情報を発信している。現在は、会員の人生を記録として残し、後世に伝えるために、新たな本『ポリオの軌跡』の出版を予定している。

(推薦者：認定NPO法人 女性と子ども支援センター ウィメンズネット・こうべ)

この度は社会貢献支援財団から、全国ポリオ会連絡会を貢献者として選んでいただき、表彰していただきましたこと、心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

全国ポリオ会連絡会はポリオリ患者の患者会です。今までポリオによる障害は固定され重度化するとは思っていませんでしたが、50～60歳代でポストポリオを発症し身体機能が低下して、生活のしづらさが出てきました。自分の体の変化に不安があっても、全国ポリオ会連絡会発足当初はポストポリオを診ることのできる医師が少なく、医療機関や医師探しから始まりました。見つかったら会で共有し情報提供するという状況でした。補装具も同様。体への負担が少ないカーボン素材の補装具の制作の協力と推進活動に取り組みました。カーボン装具が障害サービスでの給付の対象になるように、義肢装具士協会の役員さんと一緒に厚生労働省へお願いに行き、結果次の年度から認められたこともありました。

ポリオリ患者の平均年齢は70歳を超えました。加齢も加わり体の動きが徐々に悪くなっています。体にあまり負担をかけずに生活していくためには介護保険や障害サービス等をうまく利用する必要があり、当事者同士の情報交換はとても役に立ちます。

ただ当事者が支援者になることは、ピアサポーターとしてとても精神的サポートも含めて有用ではありますが、クローズの世界におちいってしまう危険性もあります。私たち自身で解決できる課題は生活の工夫程度です。今後より高齢化していく中でいろいろな分野の関係者の協力がますます必要になってきます。そのために今まで何冊か本を出版し、当事者だけではなく、医療や福祉、介護保険の関係者へ配布しました。



またリハビリテーション医学会のシンポジウムにシンポジストとして参加し、私たちの現状について発信し、ポストポリオについてや私たちの生活等について周知を図ってきました。これからもより外部への働きかけに取り組み、私たちのことを知ってもらいたいと思っています。

ポリオは世界的にはまだまだ流行している国がありますが、幸いなことに日本ではワクチン接種で予防できる病気になりました。当然私たちはどんどん高齢化の一途をたどっています。いつまで活動できるかわかりませんが、私たちの経験をまとめ、親やいろいろな人の支援や協力を得て、私たちが一生懸命生きてきた軌跡も残したいと思います。



▲ 第7回全国ポリオ会連絡会総会



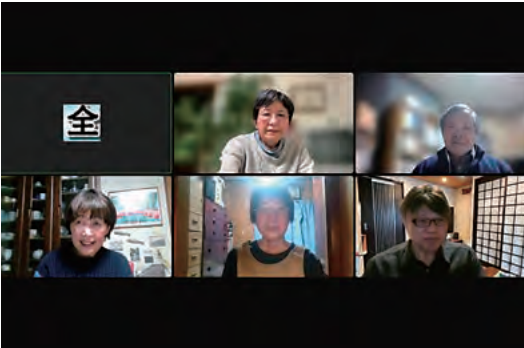
▲ 第7回全国ポリオ会連絡会総会



▲ これまでに発刊した書籍



▲ これまでに発行した会報の一部



▲ 共同代表 5名



▲ 豪州・アジア地区ポストポリオ国際会議に参加 シドニー

NPO 法人 あきた結いネット



理事長
坂下 美渉

秋田県

秋田県で矯正施設出所者等の相談員をしていた坂下美渉さんが、緊急用のシェルターとして借りたアパートの一室から、触法者の支援を始めたことをきっかけに、2013年に設立した秋田初のホームレス支援団体。「ないなら作ってしまおう」の精神で、自立準備ホームと相談支援付き住宅事業からスタートし、身寄りのない人の身元保証、財産管理などのトータル支援のほか、居住支援、グループホーム運営、障がい者の就労支援も行う。また新しい価値観を育む取り組みとして、セレクトショップ「story cat」を運営。全国70か所の福祉施設が作ったクオリティの高い商品や作品を買い付けて販売し、その売り上げの7割を各事業所に分配している。さらに2023年7月の秋田豪雨・被災直後から復興支援拠点となり、炊き出しを行い、被災者支援を開始。同年12月に休眠預金を活用した緊急用女性シェルターが完成、生活困窮した女性や母子が休める部屋を確保、より多くの困っている人、身寄りのない人を支える取り組みを広げている。

※触法者（罪をおかした障がいのある人）

この度は、大変栄誉ある賞を賜りまして、誠にありがとうございます。スタッフ、関係者一同、心より感謝申し上げます。

私たちの活動は罪を犯してしまった高齢者・障がい者のサポートから始まり、ホームレス生活者、生活困窮者、就労の機会を失ってしまった方への社会参加事業など、どんどん拡大して参りました。

人が生きていく上で必要なこと。縦割りではなくトータルにサポートしたい。

私たちがサポートしている方の多くが頼れる身寄りがなく、友人もいません。困ったことがあった時に相談する相手がないという状況は、孤独を強く感じやすく、生きている意味さえ見失ってしまうくらいの破壊力があります。最初は反発的な言動でコミュニケーションを取っていた方が、スタッフやボランティアとの関わりの中で心がほぐれていき、周囲に優しい言葉がかけられるように変わっていく様は、私たちに勇気を与えてくれます。

そして私たちは今、当事者であった彼らを一緒に働く仲間として迎え入れています。2024年は5名をアルバイトとして雇用する予定です。それぞれの特性に合わせた事業を新たに創り上げ、飲食部門ではお弁当事業、菓子製造、キッチンカーを導入しています。コミュニケーションのサポート体制を整える為、スタッフの研修プログラムにも力を入れています。

人生、山あり谷あり。それは誰しもそうです。

過去の過ちや失敗が原因で人生に希望が持てない社会は寂しすぎます。環境が違えば誰でも共に働ける仲間になっていけること、あきた結いネットが社会に証明していきたいと考えています。

あきた結いネットはスタッフ十数名の小さな団体ですが、まだまだやれることが沢山あります。あれこれやり過ぎている、事業拡大し過ぎ！というご意見も時々いただきますが…、今回共に表彰された皆様の活動に触れ、出る杭は打たれるでは無く、「出すぎた杭は打たれない」のだと改めて感じ、勇気をいただきました。全国に、世界に、社会を良くするために活動する仲間がいて、今回出逢えたことは私の人生にも大きな影響を与えてくれると感じています。

この度は誠にありがとうございました。



▲2023年10月に導入したキッチンカー。支援対象者の方の働く場所を創出



▲外部団体からの講演依頼でお話している様子



▲緊急用シェルター、障がい者グループホーム、厨房設備、災害用備蓄庫を兼ねた複合施設



▲秋田豪雨の復興支援。生活物資、食料を戸別訪問しながらお届け



▲秋田豪雨の復興支援。全国からボランティアが集まる。多い日は1日400食の炊き出しを提供



▲障がい者のグループホーム外観



▲全国の障がい者施設で作られた商品をセレクトして販売するショップ「story cat」

NPO 法人 のびの会



理事長
久間 久恵

神奈川県

若い女性に多い摂食障害やパーソナリティ障害という心の病の回復と社会生活を目指し日本初のサポートグループ（当事者、家族らの自主的な活動を医療や福祉の専門家が支える）として1991年に活動を開始。インターネットや病院の紹介で、この会にたどり着いた当事者や家族にとって、回復には非常に長い時間がかかることとこうした組織が未だに少ないことから、生涯の拠り所となっている。1998年からスタートした地域活動支援センターミモザは、様々な心の病を持つ女性のための居場所兼リハビリテーション施設として、プログラムを通じて自分自身に向き合い、社会性を育み、一步一步の歩みに寄り添っている。また、家族会では、病院や周りに容易に相談できない悩みや苦悩を、親同士で語り合い、慰めあい、アドバイスし合い、泣き、笑い、それが明日に向かう原動力にもなっていて、心理士による相談事業も行われている。医療従事者と家族の支援により、自助グループだけではなく、サポートグループの存在が、活動継続の大きな支えになっている。”回復の糸口は自分で探せる”をスローガンに、自主的な回復を支える活動を32年にわたり続けている。

この度は、このような大変栄誉ある社会貢献者の表彰をいただき、役職員一同、心より感謝申し上げます。

私たちが長年関わってきた、いわゆる拒食症（神経性やせ症）や過食症といった「摂食障害」は、心の問題から普通の食事が摂れなくなり、心身が蝕まれていく病気です。罹った人の半数は短期間で回復しますが、残りの半数は年単位で長引いて、学校や職場に行けなくなって自宅に引きこもったり、入退院を繰り返したり、時にはこの結果として、同世代の10倍の多さで、または自らの手で、若くして命を落としている実態はほぼ知られていないと思います。「ダイエットのし過ぎ」ではすまされない、まさに人生全てが左右されるほどのそんな深刻な病気への、「地域で良くなる場所を作る！」という挑戦は、今から約四半世紀前、その当事者と家族が、多くの医療者の「あり得ないだろう」論を押し切って始まったのでした。

振り返ると、開設当初は、摂食障害の当事者の『居場所兼リハビリテーション』と位置付けたデイケア施設と、家族が我が子の病気や関わり方を学ぶ場である家族会の二つが主な活動でした。最初は専門医をはじめとした医療スタッフが、嘱託としてこれらの活動に多く携わりましたが、長い年月の試行錯誤を繰り返しながら、運営スタッフの成長はもちろん、この作り上げた居場所を守り続ける責任を自覚できるほど当事者や家族が成長し、より生活に密着した体制になりました。

現在、従来の専門的サポートで個人の心の問題の解決も取り組みながら、デイケア部門は、ソーシャルスキルトレーニング、作業活動、リラクゼーション等の、社会生活を豊かにするプログラムを増やしています。家族会も、年単位で日々闘っている家

族の意見交換が中心です。体重や食事の状況ばかり問われ、生物学的に「生かされる」場所ではなく、病気や障害があってもその人らしく社会的に「活かされる」場所に、と、今は摂食障害以外の、様々な病気や障害を抱える方全般にも、その間口は大きく広がられています。そして、この体得した変化と回復の可能性を言葉と行動で発信していく広報活動が、今の法人事業の大きな柱となっています。

今回の表彰は、これまでの多くの方々との出会いとご縁、そして命の灯を費やして創成期を支えてくれた先人達のたゆまぬ努力の結晶でいただきました。その感謝の思いを忘れることなく、私たちはこの先を目指して進んでいきたいと思っています。



▲事務所の入口のロゴマーク 地域活動支援センターミモザ



▲ミモザのプログラム アートサークルで皆でステンドグラスの展示物を制作中



▲バザーで販売中の商品



▲ミモザの作業風景 パウンドケーキ製作中



▲商品のパウンドケーキ



▲年に2回の講演会風景

NPO 法人 アーシャ^{イコール}=アジアの農民と歩む会



代表理事
三浦 孝子

栃木県／インド

「アジア諸国の農村住民に対して、地位の向上と自立を促進するために、人権、貧困、環境、福祉等に関する農村開発支援事業、及び災害、紛争などによる被災住民への緊急支援活動を行い、これによって人間の尊厳を尊重する社会の形成に寄与すること（定款より）」を目的とするNPO法人。40余年前、北インド・ウッタラプラデシュ州アラハバード（現プラヤグラージ）の農業大学（現サムヒギンボトム農工科学大学）に招かれた牧野一穂さんは、小規模農民の生活水準が低迷し、貧富の格差、女性や弱者への人権軽視、根深く残るカーストの問題により、困難な生活を余儀なくされている人々を支援するために継続教育学部（マキノスクール）を設置した。2004年、牧野さん退任に際し、後継者として三浦照男さんが赴任するにあたり、これまでの活動を継続、さらに発展させることができるよう、また「貧しい農村の人々の希望の光となるような活動を」との願いをこめて、NPO法人を設立し「アーシャ（ヒンディー語で希望）=アジアの農民と歩む会」と名付けた。現在は、マキノスクールと協働で、環境保全に配慮した持続可能な有機農業の普及、貧困家庭の子ども・女性の教育支援、農村開発リーダーの育成、母子保健活動の実施、女性の社会的・経済的地位向上を目指し、縫製技術やマーケティング支援など、総合的な農村の発展を目指し、住民が自ら個々の問題を解決できるように、特に人材の育成に力を入れて支援を行っている。

この度は、栄誉ある社会貢献者表彰を賜りまして、誠にありがとうございます。

北インド、ウッタラプラデシュ州プラヤグラージ県で活動中の日本人スタッフ・現地スタッフ、また、日本でその活動を支援しているみんなで喜びを分かち合いました。心より感謝申し上げます。

私たちは、アジア諸国の農村住民に対して、農村の草の根で働く人材育成を軸として、人権、貧困、環境、福祉等に関する農村開発支援事業及び災害、紛争などによる被災住民への緊急支援活動等行ってきました。これらの活動を通して人間の尊厳を尊重する社会の形成に寄与することを目標に、2004年にNPO法人 アーシャ=アジアの農民と歩む会を発足させました。

アーシャとは、ヒンディー語で「希望」を意味します。

20年間の歩みには、カウンターパートのマキノスクール（サムヒギンボトム農工科学大学継続教育学部）を通して、小規模農民の食料生産の安定、環境保全に配慮した農業を目指すAOAC（アラハバード有機農業組合）の設立支援、「持続可能な農業・農村開発コース」運営支援、プラヤグラージ県の農村女性の収入向上、社会的・経済的地位の向上、能力開発、エンパワーメントなどを目指したAVSS（アーシャ開発奉仕協会）の設立支援など幅広い活動を行ってまいりました。

表彰式が行われた7月、現地では、ミャンマーや北東インドからの研修生がマキノスクールに集い、「持続可能な農業・農村開発コース」が始まった時でした。内紛や軍事政権下での農村を守ることはとても困難なことです。希望をもって学んでいる

姿に心打たれます。

彼らの学びを今後も継続して支援できるようにと願っております。

また、北インド農村女性の地域や、家族における地位は低く、高等教育を受けられない女性もまだ多く、男性や他の地域の女性に比べると、ウツタルプラデシュ州の女性の識字率は低いとされています。女性たちが手に職をつけ、収入を得ることがこれらの問題を解決する一助となりますから、今後とも AVSS（アーシャ開発奉仕協会）を通して、農村女性支援を継続してまいります。

20年間の歩みを通し、まだ多くの課題が残されておりますが、今回の受賞を励みとし、今後とも、より多くの方々に、「アーシャ」の活動を知っていただき、支援の輪が広がるように努力し、活動を継続していく所存です。

改めまして、この度は、大変ありがとうございました。



▲縫製工房の女性たちと新作ヨガパンツを手に(右端、スタッフ川口景子)



▲保健ボランティアによる農村での栄養教室(料理講習試食会)風景



▲保健ボランティアによる農村での身体測定調査



▲豆腐製造を学ぶ農村開発コース学生たち



▲有機米の栽培セミナーにて質問をする有機農業組合員たち 2023年



▲アーシャが支援するマエダ村のアーシャ小学校の子どもたちと校長先生(オレンジのサリーの女性)



▲モリンガ葉の選別作業を行う農村女性たち



▲現地統括責任者三浦照男と農村開発コースの研修生。マキノスクール有機農場にて 2023年

認定 NPO 法人 きららの木



理事長
江川 美奈子

奈良県

重度の知的障害のある子の母である江川美奈子さんは、先輩のお母さんから「学校にいるうちが華やで」という言葉を聞かされたことから、親亡きあともみんなが安心して生きていける施設を作ろうと、2009年に「きららの木」を設立して活動を開始。2011年に障害児福祉サービスをスタートし、その後特別支援学校を卒業した子どもたちの受け入れ場所として、生活介護を3か所開所。重症心身障害児の放課後等デイサービスや短期入所なども開所した。さらに相談支援専門員として虐待児や不登校の家庭や地域で生きづらさがある障害児者の相談活動を昼夜を問わず行っている。併せて教育関係者や社会福祉関係者はじめ様々な人たちに障害者理解のために講演活動もしている。「一人ひとりを人として大切に」の理念のもと、障害のある人とともに古都奈良の伝統文化を体験したり、四季折々の行事を実施したり、また一泊旅行など様々な体験をすることで、障害児者の喜びや笑顔のある豊かで文化的な毎日を保障している。「あなたがいるからわたしはうれしい」全ての人との出会いを大切に、障害のある人もない人も共に暮らしやすい社会づくりを目指して、地域の皆さんとのつながりを大切にしながら歩み続けている。

この15年間、障がいのある人と共に生きてきた当法人に、この度、このような榮譽ある賞を賜り誠にありがとうございます。

きららの木は、重度な障がいのある人の特別支援学校卒業後の居場所づくりのため、思いを同じくする保護者の活動から立ち上げました。当時は重度の障がいのある人の進路先が少なく、親亡きあと、安心安全に子どもたちが生活できるようにという思いで作り上げてきました。今年、7月8日には設立15周年を無事迎えることができました。設立前より、多くの賛助会員や関係機関の皆様のご支援をいただき今日に至っています。この15年間はただただ社会から必要とされることを懸命に、法人職員一丸となり有言実行で取り組んできました。法人理念の「一人ひとりを人として大切に」のもと、子どもたちは、笑顔を絶やすことなく毎日を楽しく生きてきました。どんなに障がいが高くても自分の人生の主人公であり続けること、誰もが文化的生活を送れることにこだわってきました。

現在は、特別支援学校卒業後の生活介護事業所を3か所、相談支援や居宅介護等の事業をしています。合わせて医療的ケアを必要とする子どもたちの居場所と卒業後の居場所づくりにも取り組んでいます。また、「福祉でまちづくり」に向けて、地域住民とのつながりを大切に、地域のイベントへ積極的に参加したり、当法人施設へ地域の人が足を運んでもらえるようなイベントなどを実施したり、笑顔で楽しく元気に活動しています。他に、奈良県のまほろば「あいサポート運動」・「障害のある人もない人もともに暮らしやすい社会づくり条例」の障害理解促進活動、また昨年より事業所の施設は奈良市の福祉避難所となりました。これからは障がいのある人の終の棲家を

造ることが社会的使命として法人に課せられています。

「あなたがいるから わたしはうれしい」

この素晴らしい出会いに感謝し、障がいのある人が特別な存在でなく、障がいのあると言われていない人と何ら変わりなく普通に生きていける社会を目指して、これからも活動してまいります。



▲奈良市社会福祉協議会 鳥見ふらっとさんとの共催 夏のつどい



▲奈良市福祉避難所 合同防災訓練



▲放課後等デイサービス日向ここ(重症心身障害児)



▲みんなの畑



▲リレー講座(陶芸): 地域の子どもたちと



▲花の彩り事業(生駒山麓公園)



▲鹿苑ツアー: 奈良公園の鹿にどんぐりをプレゼント



▲民生委員研修会: 講師として